

英文学における“文学形態の流れ”について

見 沢 進

発 生 よ り

イギリス文学とは、いうまでもなくイギリス人によって英語で書かれた文学のことである。イギリス文学は、種々な要素を包含しつつも、概念的にいえば良識に富んだ、健康的な文学であるといえるだろう。フランス文学に見られるような情熱や華麗さ、或いはロシア文学における深刻さなどの点においては、いささか稀薄な感じがないでもないが、知性と良識の裏付けのもとに機智と諧謔とを織りこみ、客観的に人生を眺めるといった、ノーマルな大人の文学といえるかもしれない。その意味において、きわめてユニークな存在といわねばならない。そうした文学が生れた根本は、イギリス人がそうした国民であるということができる。

紀元前3世紀の頃 **Indo-European Race** の一派である **Celts** 民族が中部ヨーロッパにその勢力をふるっていたが、そのまた一分派がこの島に侵入してきた。**Britons** という一団は、主として東南部、**Gaels** は西部と北部、**Coledonian** は北端部に入り、前住民族を追って定住することになったのである。この三者は互に抗争していたが、その中の最強な **Britons** の名をとって地名としたのである。**B. C. 55年**、ローマの **Julius Caesar** は **Goul (gollia)** を征服したのち、この島に軍を進め、その後もローマ軍は数回侵略して **B. C. 82年**には完全にローマ帝国の一領土とし、これを **Britannia** と名づけたのである。それ以後3世紀半、この島はローマの統治下にあって、ある程度その文化の影響を受けたが、5世紀の初め、ローマ本国がゲルマン民族の脅威を受け、ローマの軍隊が引揚げてしまったため、同種族が攻撃し合うという混乱に落入了のである。この時ゲルマンの一派 **Teutons** の中の **Jutes, Anglos, Saxsons** の三部族がデンマークや **Eerk** 川下流地方から侵入し、前住族の **Britons** を圧迫して北西部の山地に追いやり、東南部に強固な地盤をつくるに至ったのである。この民族は **Sea Walf** として恐れられたが、やがて前住民をも包含して島全体を征服して **Anglo-saxson** 民族としてイギリス国民の中心となったのである。**Celts** 民族は元来感受性が強く、感情は繊細で想像力が豊かであり、神秘性をたっとぶ性質であるのに対して、**Anglo-saxson** 民族は質実剛健であり、常識的で公正穏健であるため、したがって保守的傾向を持ち、また生活の面においても、思考の面においても実地的な民族であった。この対称的な特質をもっている二民族が融合し、これを基礎として生れたのがイギリス文学である。さらに11世紀の **Norman Conquest** によって優雅・端麗な明るい **wit** に富んだ南方型の文化が浸透し、後世のイギリス文学の生まれ出る要因となったのである。そしてその母胎は一層豊かで複雑なものとなってゆき、多種多様に異なる要素を含んだ土壌から外国に見られない多様性をもった、まったく特殊な文学の花が咲きほこったのである。

イギリス文学の中で最も古い作品は、叙事詩“Beowulf”であり、これは Anglo-saxon 民族がまだこの島に渡ってこない以前に作られた物語詩である。これは宮廷における演席で、豎琴に合せて吟遊詩人が歌った物語を語り伝えたものであり、8世紀末から17世紀末にかけて諸方から集めた原作を集成したものといわれ、現在は大英博物館に保存されている。この稿本は10世紀末に書かれたものといわれている。この作品は Anglo-saxon の生活をかなり具体的に描いており、またキリスト教的精神が多く盛られている点にも価値がある。そしてこれはこの時代の人々が自然に打ち勝ってゆく姿を描いたものであるといわれているけれども、結局は北欧の民族を擬人化し、それに打ち勝つものを描いたものであると見るのが妥当であろう。Epic について現われた文学形態は Romance である。これは Norman Conquest によって南方文学が導入されると共に、この島に封建制度が確立され、騎士道はなやかな12～13世紀において盛んになった文学である。

Romance というのは、元来フランス、スペインなどで使用された一地方語（ロマン語）で書かれたものの意味で、現実性を考慮することなく、また歴史的な意味も持たない武勇伝、恋愛談などを散文や韻文の形で書いた物語である。

Romance の源流をたどってみると、次のように分類される。

(1) classical なもの

古代のギリシャ、ローマの英雄伝説に基ずいた物語。例えばアレクサンダーの一代記とか Troy の物語。

(2) Artharian Romance

キング・アーサと Round teable の伝説に基ずくもの。英語で書かれ、この物語を集大成したものは Sir Thomas Malory の“Morte D'Arthur”である。

(3) French Romance

Charlemagne や Huon of Bordeaux など。フランスの英雄の物語。

(4) English Romance

チュートン系の物語でフランスを通して入ってきたもの。“Bevis of Hampton” “Havelok the Rave” を主にしたもの。

(5) German Romance

“Niebel Ungenlied” など。

Romance は騎士道制度という社会の一時的な状態から生まれたものであり、元来娯楽本位の読物で、なんら真実性はなく、その構成は粗雑で、ただ単にだらだらと話を進めてゆくだけで、近代小説に多く見られるような緊密さはない。はなやかに誇張された表現はあるけれども、その内容はいたって空虚であり、余りにも愚かな存在であるとみられるようになり、やがてその姿を消さねばならない運命となるのである。Romance が騎士道の宮廷において栄えていた一方、次第に有力になりつつあった教会の影響や、教訓を効果的なものにするためには物語の形式を通してするのが良い方法であると考えた。さらに中世の一般の人々の知能では、歴史と物語文学の相違が実際に理解できなかったのである。そこで彼らは空想的物語という形式を生んだのであるが、それは倫理的理

想などを擬人化して語るものとなった。その実例は、中世の動物物語だとか、紋切型の宮廷人達によって、恋愛の理想が表現されているような物語にも見ることができる。この寓意物語も初めは単純なものであったが、次第に精巧なものになっていったのである。13世紀にはイタリーの詩人 **Dante (1265~1321)** が最大の寓意物語と称する“**Divine Comedy**”を書いたのである。これは地獄、煉獄（小さな罪を犯した人達が身を清めにゆくところ）天国における詩人の想像的経験を述べた膨大な詩である。この詩では、それぞれの事件、それぞれの人物がいずれも魂的な意味をもち、詩全体としては政治的倫理的な面について独自の解釈をもっている。**Divine Comedy** はこの時代の人々の知的な宗教的経験を総合したものの上に立っており、中世最大の詩とされている。イギリスにおいても寓意物語は非常に好評であり、1550年以前におけるこの形式のものとしては14世紀の社会状態を風刺した **William Langland (1330~1400)** の“**Piers the Plowman**”が最も有名である。

1550年以前にこれらの三種類の形(**National Epic, Romance, Allegory**)以外にも、種々な文学形式も存在した。例えば説教者が倫理的な真実を列証するのに大いにもちいた教訓物語 (**Exemplum**)、こっけいな世俗物語 (**fabliau**)、クリスチャンの聖者の生涯における奇蹟の物語 (**Saint's Legend**) その他歌曲、宗教的な祝歌の形式の抒情詩はかなり古くから現われていたのである。

中世末期におけるイギリス文学のさまざまな **type** を知るには偉大な詩人 **Geoffrey Chaucer (1340~1400)** の作品を研究するのが一番良いであろう。彼は驚くべき程のさまざまな **type** の作品を残している。以下分類的にみると

Lyric : “**Furture**” “**Merciles Beaute**”

Allegory : “**Hous of Fame**”

Fabliau : “**The Miller's Tale**”

Romance : “**The Knight Tale**” **Sir Thopas**”

Saint's Legend : “**The Second Nun's Tale**”

しかし **Chaucer** の名声を不動なものにした最大の作品はいうまでもなく“**Canterbury Tale**”である。これは一連の話を一つの構成の中に巧みにとり入れ、一団の人々が次々に話を語るという形式で、イタリーの **Boccaccio (1313~1375)** の作風を模倣したものと思われる。

イギリスにおける劇の起源は紀元1550年以前に見いだされる。近世のヨーロッパ劇はローマ文化の没落以後、事実上忘れられてしまっていたが、ギリシャ、ローマの劇にその起源を持つものではなく、**Christmas** や **Easter** などの時に教会で行なわれた短かいラテンの対話から発達していったと思われる。そしてここから発して聖書の物語を劇化したもの、即ち **Mystery** とか **Miracle play** といわれるものが生まれ、さらに劇の形をとった **Allegory** 即ち **Morality play** といわれるものが現われたのである。これらの素朴な劇が一般大衆の間に好評であったことから、やがて歴史物語を劇の形で現わした **chronicle play** や寓話を劇化した **Farce** などが出現するに至るのである。

今一つ見落してはならない文学形式に **Ballads** がある。これは学問のない一般民衆が節をつけて歌ったり、朗唱したりする韻文の比較的短かい物語である。その内容は主として **Robin Hood** の

ような国民的英雄をたたえたり、或は“The Battle of Otterburn”のような国境地方の戦闘における功績、“The wife of Usher’s well”や“Kemp Owyne”のような亡霊や魔法などの迷信的な物語、その他叛逆暗殺、残虐行為などの伝説を歌ったものなどである。これらの Ballads は長い間、口から口へと伝え受継がれたもので、その起源は不明であり、作者もわからない。しかしこの物語の内容は単純素朴であり、その表現は極度に圧縮され、劇的であることが大きな特長である。Ballads の多くは一人のリーダーが歌い、合唱の部を聴衆全部が歌うという方法がとられていたようである。詩としての特長は Alliterative formulas が一般的であるが、これらの特徴は伝統的な詩の影響でもあり、素朴な人々の心に素直に訴え興味をそそるものであり、歌う人達によって取りあげられたのである。これと同じような特長は、今日子供達が遊戯の時などに歌う歌に良くうかがうことができる。このような Ballads が詩の研究者や学識ある読者の注意をひくようになったのは18世紀の終り頃になってからである。この Romanticism の勃興期においてそれまで広く認められることがないが、民間に根強く生き続けていた Ballads の持つ新鮮さ、自然ののびやかな感じ、力強さ、圧縮されたむだのなさなどが新しく認められ、詩の領域において物語詩に強い影響を与える事になった。1550年前に栄えたイギリス文学の主な形態は次のように区分することができる。

I Lyrical poetry : songs Carols.

II Narrative poetry :

- (a) Epie : “Beowulf”
- (b) Romance : “Arthurian Romance”
- (c) Allegory : “Piess Plowman”
- (d) Religious Narrative : “Saint’s legends”
- (e) Fabliau : chaucer’s “Miller’s Tales”
- (f) Ballads : “English and Scottish popular ballads”

III Drama

- (a) Miracle and mystery plays
- (b) Morality plays
- (c) chronicle plays
- (d) Farces

散文というものが、まだこの時代に出現していないことに注意すべきであるが、これが現われてくるのはルネッサンス以後に待たねばならない。

1550～1660年間

I 詩について

ルネッサンスは各分野においてヨーロッパ文化に大きな変化をもたらしたが、イギリス人がその影響を実際に受け始めたのは1550年以後である。印刷術の発見、新大陸の発見、生活上の古習の破棄、国家意識の高揚、信仰、教会制度の変化、芸術の再認識等ルネッサンスによって生じたこのよ

うな情勢がイギリス文学の形成に強い影響を与えたことというまでもないが、特に文学形態の発達に与えた最大の影響は、“学問の復活”即ちギリシャやローマの古典の発見、本釈、解釈等であろう。

そしてイギリスの文学者達はここに典型とすべき文学の形態を見出し、**Aristotle** の “Poetics” や **Horace** の “Art of poetry” などに在る文学理論により、その批判の基準を学んだのである。古典文学の発見と解釈とは、最初イタリアにおいてなされ、16世紀のイギリス文学者がそれに依存したのはその解釈法であった。このようにして古典の影響を受けることによって、この国に成長した伝統の詩はいっそう深められ、拡充されたのである。1557年に出版者 **Richard Tattel** が編集し出版した **Songs and Sonnet's** は、今日 **Tattel's Miscellany** と呼ばれ、ここに集録されている抒情詩には伝統的なものと異って新しい影響を受けたことが明らかに見られる。在来の抒情詩の調子が深く純粋な表現を持つといった独得な詩として発達していることが認められるのは、当時の人々が美とメロディーに対して新しく豊かな感覚を持っていたからだだろう。以後約100年にわたって歌われる詩、即ち **Songs** が他の時代に例を見ないほど盛んであったが、その理由の一つとしては劇の隆盛と共に劇中で音楽にのせて歌う新しい歌がたえず欲求されたからであろう。そして音楽と詩との結合は **Shakespeare** の劇の中に現われる美しい歌において明瞭に反映されている。

Horace の **Ode** に現われた優雅・調和・気品・端正などという優れた特徴に心をひかれた **Ben Jonson** (1573~1637) や **Robert Herrick** (1591~1674) などの詩人によって新しい傾向の詩が考えられ、これが詩の韻律に変化をもたらすことになったのである。17世紀になると **Shakespeare** の音楽的な詩や **Jonson** の古典的な完成美をそなえた詩のみが詩の伝道にとどまっていることができなくなってきた。それは音楽的甘味さや、古典的な魅力に反抗し、内容的にも表現の上においても自然のままの粗野、皮肉な態度などを意識的にめざすような新しい形の抒情詩が現われたからである。

これらの新しい形の抒情詩と共に **Sonnet's** の形式が興味を持たれるようになってきた。抒情的表現としてのこの形態はイタリアにおいて **Petrarch** (1304~1374) によって創始された。英語で書いた最初の **Sonnet's** 作者は、**Sir Thomas Wyatt** (1503~1542) と **Henry Haward** (1517~1547) の “**Earl of Surrey**” でその詩は **Tattel's Miscellany** に集録されている。16世紀の後半にはこの詩形が非常に流行し、やがて **Shakespeare** によって完成された。この時代における **Sonnet's** の形式は14行からなる **Iambic Pentameter** でラインを三つの **Quatrains** と結尾の **Couplet** とでできている。

これが **Elizabethan Sonnets** といわれるものである。17世紀になってこの形態の詩に対する興味がうすれていった時 **Milton** が新しい形態 (**octave** と **sestet** を配合したもの) を創案した。いわゆるこれが **Italian Sonnets** といわれるものである。

Elizabethan Sonnets

- a. Let me not to the marriage of true minds
- b. Admit impediments. Love is not love
- a. Which alters when it alteration finds,

- b. Or bends with the remover to remove :
- c. O No : it is an ever-fixed mark,
- d. That looks on tempests and is never shaken ;
- c. It is the star to every wandering bark,
- d. Whose worth's unknown, although his height be taken.
- e. Love's not Time's fool, though rosy lips and cheeks
- f. Within his bending sickle's compass come ;
- e. Love alters not with his brief hours and weeks,
- f. But bears it out even to the edge of doom.
- g. If this be error and upon me prov'd,
- g. I never writ, nor no man euer lov'd.

— shakespeare —

Italian Sonnets

- a. Lawrence, of vertuous Father verluous Son,
- b. Now that Fields are dank, and ways are mire,
- b. Where shall we sometimes meet, and by the fire
- a. Help waste a sullen day ; what may be won
- a. From the hard Season gaining : time will run
- b. On smoother, till Favonius re-inspire
- b. The frozen earth ; and cloth in fresh attire
- a. The Lillie and Rose, that neither sow'd nor spun.
- c. what neat repast shall feast us, light and choice,
- d. Of attick tast, with Wine, whence we may rise
- e. To hear the Lute well toucht, or arlfull voice
- c. Warble immortal Notes and Tuskan Ayre ?
- d. He who of those delights can judge, and spare
- e. To interpose them oft, is not unwise.

— Milton —

(イ) 4行が連句になって最後に対句になっている形

(ロ) octave は8行 sestet は6行, 時には sestet の方を6行でなく二つに分けて3行ずつにすることもある。

抒情詩の第三の形(Song Sonnet) ode で,これは古典文学の研究が進むと共に,イギリス文学に現われた新しい形式で, Abrahan Cowley(1618~1667)がギリシヤの詩人 Pinda から学んだ Pindaric ode がある。元来 ode はギリシヤ劇の中で合唱隊が音楽やダンスをともなって歌ったものであるが, 厳粛, 豪華な思想と尊重, 静音な表現で, 多くは呼びかけの形式で歌った詩である。この形式

が流行し、やがて17世紀から18世紀の初めにかけてこれに手をつけない詩人がないほどであった。

第四の形はギリシャの詩人 **Theocritus** の影響のもとに生まれた牧歌的な **elegy** であり、その代表的なものは **Milton** の **Lycidas** (1637) である。その他物語詩は依然として盛んであり、最も多く行われたものの一つとして古典的な主題を精巧な形で歌った長編物語詩で、**Shakespeare** の “**Veneis and Adone's**” は代表的である。牧歌調の詩も流行したが **Spenser** の “**The Shepheardes Calender**” (1579) は **Theocritus** の詩法をまねたもので、後の詩人に少なからぬ影響を与えている。寓意物語の詩は衰微していったが、ただ **Spenser** の美しい詩 “**The Faerie Queene** (1589)” がイギリスのルネッサンス前期における唯一のものとして目立っている。そしてこれは **Spenser** が発明した、いわゆる **Spenserian Stanza** (a. b. a. b. b. c. b. c. c. の9行詩) という新しい詩形がイギリスの詩の中に生まれでたという意味において重要性をもっている。

II 散文について

散文が文学の世界に登場したのはルネッサンス以後のことであり、一部階級の特権であった学問が一般に普及すると共に読書も大衆化してきた。そこで詩という限定された言語で表現しにくいことを散文で書こうとする人達が多く出現した。と同時に、それらを受け入れようとする人の数も増大したのである。更に散文が民衆の中に入りこんだその理由の一つには **William Caxton** (c.p 1422 ~1491) が印刷術をイギリスに輸入したことによるものである。散文は言語によるなんらの制限を受けることもなく、自由に書きうるわけであるが、詩が立脚する基盤である韻律の束縛から開放されたための筆者のきまぐれにしたがって勝手な方向に進み、かなり混乱したものであった。そしてこの時代の作者達は、それぞれ独自の **style** で文章を書き、これが後の小説の先駆となったのである。**Sir philip Sidney** “**Arcadia**” (1580) は空想的な **knight** 物語であるが、気品の高い優雅な文章で、ここに描かれた美しい牧歌調は一代の流行となり、多くの模倣者を生むにいたったのである。**John lyly** の “**Euphues**” (1578) や “**Euphues and his England**” (1580) は一環した筋はなく、アテネ出身の青年がイギリスに渡って人情、風俗などを観察しその見解を述べるもので、内容的には空想的であるけれども、その文章は章句を並べたり頭韻を用いたりして華麗な文体で詩から純粹の散文にいたる道程の役割をなしているといえるであろう。その他 **Robert Green** の “**Groats worth of wit**” (1592), **Thomas Lodye** の “**Roaslynde**” (1590) など、それぞれ特徴ある文体であり、また異った味の物語で時代の嗜好に大いに役立ったものである。この期の散文に見られる特長としては次のものがあげられよう。

Sir Thomas Browne (1605~1682) “**Religio medici**” におけるようなりズミカルな美しい文体、**Francis Bacon** (1561~1626) の “**Essays**” に見るするどい警句的な完結さ、**John Milton** (1608 ~1674) の散文中最もすぐれたものといわれる “**Areopagitica**” に現われた知性に強く訴える力、**Igack Walton** (1593~1683) の “**The Complete Angler**” にある古語態による上品さなど。しかし全体としてみればこの期の散文は、まだ近代的な形態を整えているものといえない。それは近代の散文において尊重される明確・平易・簡素・適応性といった要素をそなえておらず、いわばまだ

形成の段階途上であったからであろう。近代の読者にとっては余りに非現実的で古風でぶかっこうで退屈な文章で、歴史的興味以上にでるものではなかった。

これらの中で **Essay** という形態を完成した **Bacon** の功績は見のがせない。**Essay** は元来フランスで **Michel de Montaigne (1533~1592)** によって純粹の文学形態としてまず発達したものであるが、**Bacon** はこれをイギリスに紹介し、“**Truth**” “**Staudies**” といった抽象的な問題に関する **Essay** を発表した。それよりのち **Essay** という文学形態がイギリス文学の中で重要な位置を示すことになったのである。

Ⅲ 劇について

紀元1550年以後、劇はイギリス文学において、これに並ぶものがないぐらいまでに発達し、いわゆる劇の黄金時代を見るに至ったのである。この時代以後の劇は形式的には単純であり、内容的に多様性にとぼしく真実を情に訴える力に欠けていた。したがってその存在価値は文学的にも、また社会的にも弱く、その実質においても表現においても未熟であった。劇が完成の域に達するためには庶民生活の中にとけこんで、安定した位置にとどまらねばならない。そのためには民衆の欲求にかなった表現方法をとること、劇という形態に関して正しい概念を持つということ、劇作家が生きた姿の人生をとらえ、そこに真実を見いだすこと——これらが必要な条件であった。そしてルネッサンスと共にこれらの条件がみたされるようになったのである。

Plautus, **Frence** の喜劇, **Seneca** の悲劇, **Aristotle**, **Horace** の理論などが文学としての劇という概念を形成する役割をなした。**Christopher Marlowe (1564~1593)** の **blank verse** が文学的表現媒体として登場し、やがて **Shakespeare** が完成したのである。時代の欲求からロンドンに劇場が建ち、これがたえず上演すべき脚本を欲求する。そして発展の道をたどる活気にあふれた多彩な **Elizabeth** 時代というイギリスの歴史における最もはなやかな一時代の、いわば国家的な熱狂といった社会の雰囲気の中に多数の劇作家がロンドンに集まったのである。その結果劇界に空前の発展と盛況をもたらしたのである。近代的な意味での劇が現われてから、わずか50年に満たないうちに形式的にも、内容的にも多種の劇が誕生した。**Hamlet** の中の **Palonius** の言葉に次のようなものがあるが、当時の劇の多様性を暗示しているといえよう。

The best actors in the world, either for Tragedy, Comedy, History, Pastoral, Pastoral-Comical, Historical-Pastoral : Tragical-Historical : Tragical-Comical-Historical-Pastoral : Scene individable, or Poem unlimited. Seneca cannot be too heavy, nor Plautus too light, for the low of writ, and the liberty. These are the only man.

Shakespeare の劇を集め、最初に出版した編集者はこれを **Comedy, history, tragedy** の三つのグループに分類したが、これは適当な方法であると思われる。**Elizabeth** 時代までの **tragedy** はだいたいにおいて高い階級の人、あるいは国の重要な地位にある人の上におそいかかった不幸な運命を描いたものが多い。そしてそういう人々の没落をきたす原因は、時としては自己の力では遺憾ともしがたい周囲の状況による場合もあり、また自己の性格の中にある欠陥による場合もある。悲

劇の筋は一国家の運命によって拘束され、また超自然的な力によって影響されることもしばしばあり、その結末は通常主人公の死という形をとり、常に不幸で終わっている。そしてそれは反逆人、忘却、復讐などに起因する場合が多い。悲劇の色調は時には息抜きのため、こっけいな場面もとり入れられることもあるが、全体としては深刻であり、また用いられる言葉は **blank verse** で、これが美しさと力強さを現わしているのである。**Elizabeth** 時代の **tragedy** はおよそ次の三種類に分類することができる。

- (1) **Shakespeare** の “**Macbeth**”, “**Hamlet**” によって代表されるいわゆる **Romantic tragedy**。Romantic な個性の **tragedy**。
- (2) **Ben Jonson** の “**Sejanus, his Fall**” によって代表される **clacical tragedy**。これは材料をローマ時代の物語からとり、ローマの **tragedy** をまねたもの。
- (3) **Thomas Heywood** の “**A Woman Killed with kindness**” によって代表される **Domestic tragedy**。これは当地の犯罪事件に材料をとった **Sensational** な物語。

この時代の **History play** は **Holinshed** の “**chronicles**”, **Plutarch** の “**Parallel Lives**” など **popular** な歴史に題材をとった歴史の断面を劇化したものである。この種の劇は喜劇的な場面を混入しながらも本質的には悲劇的な要素をもっている。しかし人の心を強くひきつけるような明確な **plot** の構造を欠いているという点で **tragedy** とは異っている。1585年スペイン艦隊の激威によって生じた愛国心、国民的誇りによってイギリスの過去の歴史に取材した劇が大いに民衆の心をひく結果となった。

Shakespeare の **Richard III**, **King Jone**, **Henry V** などは政治の紛糾、国家の栄光などに対する興味が重要な要素となっている。又この時代の **Comedy** には色々な形がある。**Shakespeare** の “**The Comedy of Errors**” は純然たる茶飯狂言で、人の間違いから大騒動が起るといったたわいのないおどけた話である。“**Twelfth Night**” は抒情美に富み、“**As you a like it**” は牧歌的情緒ゆたかな **Comedy** である。名門出身の人物、洗練された感情、種々の困難を経た後に **Happy End** に終るというのが根本的なテーマとなっている。この種の **comedy** には例えば “**The Marchant of Venice**” “**The Winter’s tell**” などにみるように悲劇的要素がとり入れられている 場合が時々ある。けれども結末は常に **Happy** である。

Ben Jonson は写実的で 風刺のきいたいわゆる “**Comedy of humors**” を確立したのである。彼の理論には二つの要素があり、その一つは人間はただ一つの特長、つまり献身的な気質とか強欲な性質といったようなものによって圧倒される場合が多いということ、また一つは人間の本質は通常低劣なものであるということである。したがって **Jonson** には陽気さ、美しさが少なく、その風刺はするどく冷笑的であるのが普通である。

さらに言及すべき劇文学の一形式がある。それは **Masque** で、これは貴族間に流行した一種の無言劇であったが、その後対話に歌をとまったりして複雑な形式となった。しかし **plot**, 人物、台詞などの純粋な劇要素よりも歌、音楽、背景などに効果を置いた劇的娯楽ともいえるべきものである。この種の劇の代表的作家は **Ben Jonson** であるが、現在もこの種の作品が読まれているものと

しては1634年に上演された Milton の “Comus” である。

1550年から1660年間に発達した主な文学形態を分類すると次のようになる。

I Poetry

a. Lyrical poetry

1. Song……Shakespeare, Jonson. Donne, Herrich.
2. Sonnet……Sidney, Shakespeare, Milton.
3. Ode……Cowley
4. Elegy……Milton

b. Narrative poetry

1. Allegory……Spenser “Faerie Queene”
2. Long Narrative……Shakespeare “Veneis and Adone’s”
Marlowe “Hero and Leander”
3. Pastoral poetry……Spenser “The Shepherd’s Calender”
4. Descriptive poetry……Milton “Lallegro” Il Penseroso”

II Prose

a. Romance……Philip Sidney “Arcadia”

Robert Green “Groatsworth of Wit”

Thomas Lodge “Rasalynde”

Thomas Nash “The Unfortunate Fraveller”

b. Essey……Bacon “Esseys”

c. Miscellaneous prose

1. History……Hakluyt “Principal Navigations” Vaguges “Traffcas and Discovereis of English Nation”
2. Varied forms……Browne “Religis Medici”
Walton “The Complete Angler”

参 考 文 献

- An Outline History of English Literature : W. H. Hudson
A Cronological Table of Englisl Literature : 朱牟田夏雄
A Survey of English Literature : R. H. Bhyth
A Historical of Survey of English Literature : P. milward
A History of English Literature : L. Hearn
An Introdu ction of English Literature : J. Mulgan, D. M. Davin.
イギリス文学史：斉藤 勇
英文学史概説：斉藤 勇
英米文学史概要：吉田三雄
英米文学ハンドブック：中西信太郎
概観イギリス文学史：田代三十稔
英文学ハンドブック “Milton” : E. M. W. Tillyard

(著者 一般教養 昭和49年2月25日受理)